

## 『モル・フランダーズ』の「序文」を読む

井 石 哲 也

## I.

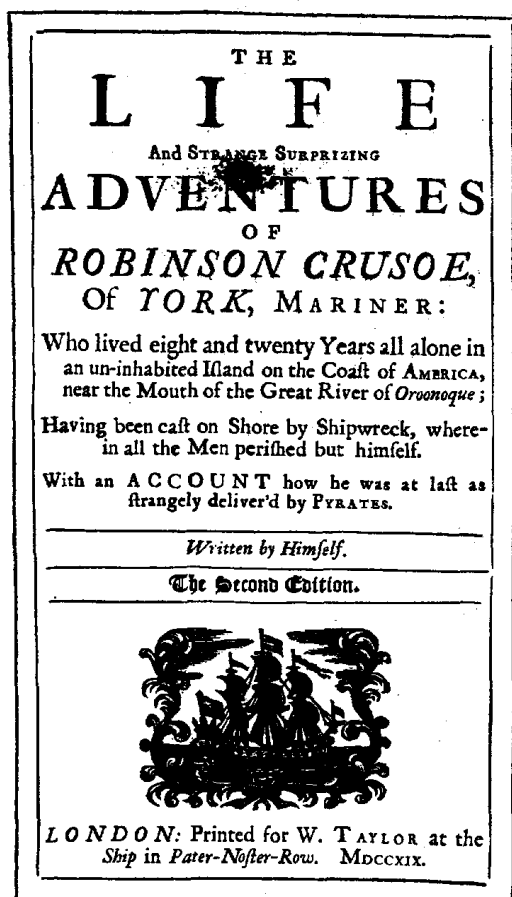
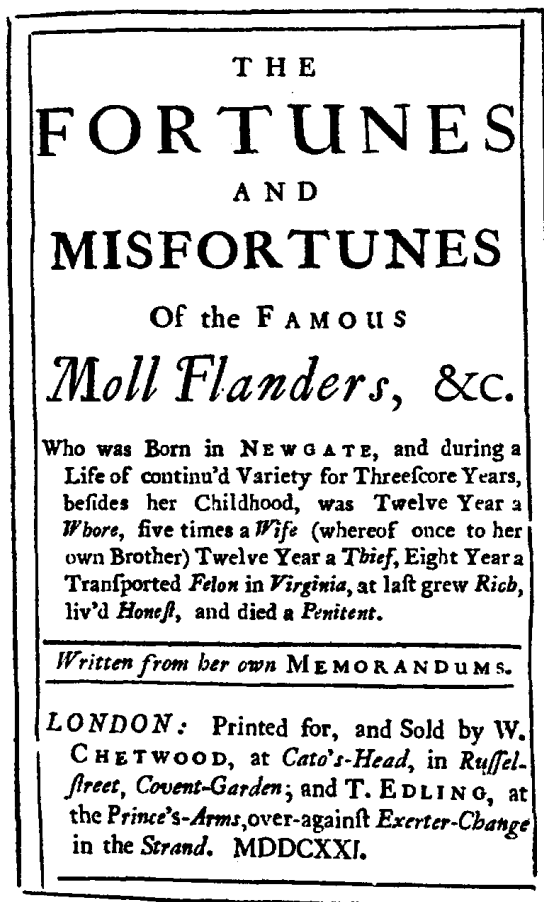
デフォー (Daniel Defoe, 1660-1731) が晩年に書いたフィクション群はほぼすべてその作者名を明かさない形で出版されている。これは「小説」(Novel)=フィクションという明確なジャンルの意識をもって、「文学における新境地の開拓者」<sup>1</sup>として作家宣言をおこなったフィールディング (Henry Fielding, 1707-54) とは対照的である。著者名を伏せた形でのデフォーのフィクション執筆は、たとえば、思想的発言を作品に盛り込んだ場合に予想される、直接的な反発や攻撃に対する自己防衛の役割を果たしていた。このような執筆背景をふまえて実際にデフォーのフィクション群の体裁をみてみると、先ず気づかされるのは次のような特徴である。

- ①タイトルページの正式なタイトル名が長く、<sup>2</sup> 単なるタイトルというよりは物語の要約としての役割を果たし、これが読者の関心を引きつけ、作品の宣伝効果をあげていること。
- ②その多くに序文 (Preface) がつけられ、作品の虚構性を否定し、作品の真実性を読者に保証する役割を果たしていること。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 'the Founder of a new Province of Writing' Henry Fielding, *The History of Tom Jones: A Foundling* (Oxford: Wesleyan Univ. Press, 1975), 2 vols. Volume I, p. 77. (Book II. Chap. I)

<sup>2</sup> 但し視覚的にはタイトルの一部分、通常は冒頭が大きな活字で強調されており、読者にはこの部分が最初に目に入る。

<sup>3</sup> 『疫病流行記』 (*A Journal of the Plague Year, 1722*) には序文が付されていない。

〔図版1〕<sup>4</sup>〔図版2〕<sup>5</sup>

<sup>4</sup> 『ロビンソン・クルーソー』第二版のタイトルページ（筆者所蔵）。初版（1719年4月25日）のわずか二週間後（5月9日）に出版された。内容などは基本的に初版と同一、船のイラストが加えられている点が異なる。出版年月日については、Pat Rogers, *Robinson Crusoe* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1979), pp. 4-7. を参照した。

<sup>5</sup> 『モル・フランダーズ』初版（1722年1月27日）のタイトルページ。出版年はMDCCLXXI（正しくはMDCCXXI〔1721〕）となっているが、これは当時イングランドでユリウス暦（Julian calendar）が使われていたことによる。イングランドはその後1752年に、現行の太陽暦の基になるグレゴリオ暦（Gregorian calendar）を採用した。A *Norton Critical Edition*, Edited by Edward Kelly (New York: W.W. Norton & Company, 1973), p. 269 (A Comment on the Text) 参照。図版はNorton 版中のもの。

③序文において、作品を読むことの宗教的および道徳的意義が強調されていること。

デフォーのフィクションのほとんどは出版当時の読者には真実の記述として受け取られていた。序文においては、表向きに「编者」(Editor)や「代弁者」(Relator)を想定し、自らの存在を隠してはいるが、実際はその裏に物語を統括する影の作者デフォーが存在する。<sup>6</sup> 本稿では、いわゆる仮面としての序文の役割を考える上で最も興味深いと思われる『モル・フランダーズ』(*Moll Flanders*, 1722)を取り上げ、デフォーの小説技法の一端を考察してみたいと思う。

## II.

『モル・フランダーズ』執筆にあたって、デフォーははたしてどういう読者層を想定していたのだろうか。デフォーの死後、リチャードソン(Samuel Richardson, 1689-1761)の『パミラ』(*Pamela*)が世に出た1740年以降、英国では「貸本屋」(circulating library)が流行し始め、「小説」というジャンルの普及に拍車をかけた。安価で本を借りることができるようになった庶民に最も人気のあったもののうちの一冊がこの『モル・フランダーズ』である。

---

<sup>6</sup>『ロビンソン・クルーソー』(*Robinson Crusoe*, 1719)は出版後すぐ、例外的にデフォー執筆が暴露された。フィクション群の序文における作者デフォーの立場についての論考は、拙稿「英国小説の勃興 — Defoe におけるFactとFiction —」活水女子大学・短期大学『活水論文集第33号英米文学・英語学編』(1990). pp. 55-69. 参照。

『モル・フランダーズ』がデフォー作であることが一般に明らかになったのは、18世紀に流行した貸本屋の最大手、ノーブル(Francis Noble, d.1791)のコピー(1776年)によってである。ここで初めて作者デフォーの名(. . . *Published by Mr. Daniel Defoe.*)がタイトルページに記された。P.N. Furbank and W.R. Owens, *A Critical Bibliography of Daniel Defoe* (London: Pickering & Chatto, 1998), pp. 199-201.

デフォーは「説教を行うことは少数の人間に話しかけることで、本を出版することは全世界の人間に話しかけることだ」という言葉を残している。<sup>7</sup> ジャーナリストとして経験豊富であった彼はフィクションを書くにあたって、まず最大数の読者を獲得する方法を模索したのであろう。そのために彼なりの方法、つまり作品の要約的役割を果たす長いタイトルをつけ、さらに「序文」において作品を読む効能を説くという方法をとったのは大いにうなずけることであった。

### III.

「序文」全体は、その内容と役割によって三部から構成されている。

- ①物語の真実性を強調する部分
- ②出版の意義（宗教的、道徳的有用性）を強調する部分
- ③物語の細部についての補足説明

以下ではこれらを私なりに翻訳し、順に解説していく。<sup>8</sup>

#### 【訳】 [序文]

世間では最近、小説やロマンスがあまりに流行っているので、人物の名前やその他の事情を伏せた個人的な秘密の物語を嘘のないものと受け

<sup>7</sup>Daniel Defoe, *The Storm* . . . 1704, sig. A<sup>2r</sup> ('Preaching of sermons is speaking to a few of mankind: printing of books is talking to the whole world'). Also see Ian Watt, *The Rise of the Novel: Studies in Defoe, Richardson and Fielding* (London: Chatto & Windus, 1957), p. 103. 邦訳では、イアン・ウオット『イギリス小説の勃興』橋本宏・志賀謙・藤本昌司・丸小哲雄共訳（鷹書房、1998）、p. 146.

<sup>8</sup>これまでに二種類の翻訳が出ている。小山東一訳『モル・フランダーズ』（河出世界文学全集 1954年）、伊沢龍雄訳『モル・フランダーズ』（全2巻 岩波文庫 1968年）本稿の「序文」翻訳の底本には、Daniel Defoe, *Moll Flanders*, ed. G.A. Starr (Oxford: Oxford Univ. Press, 1971) を用い、他に適時、A Norton Critical Edition (注4), *The Shakespeare Head Edition of the Novels & Selected Writings of Daniel Defoe* (1927; rpt. Oxford: Basil Blackwell, 1974) を参照した。

取ってもらえるかどうかは難しいことと思う。したがってこの点については、読者諸氏の判断にまかせ、好きなように受け取っていただくことで良しとしなければならないと考える。

原著者はここで自分自身の身の上話を書いていることになっており、話の一番最初の部分において本名を伏せた方がよいと思うわけを述べ、その後はこの問題には全くふれていない。

この物語のオリジナルを新しい言葉に移し替えたり、いまここで話の対象となる、この有名な婦人の文体に多少手を加えたことは事実である。特に、彼女の身の上話について、最初の書き方をもっと慎ましい言葉で語るように書き変えた。というのは、当初私の許に手に入った原稿は、彼女が自ら言っているような、悔い改め、慎み深くなった人間のものというよりは、いまだにニューゲイトに入獄している者の言葉使いで書かれていたからである。

彼女の物語を完成し、読者諸氏が今こうして読まれるような体裁のものにするよう筆を加えるにあたって、これを相応しい装いにあらため、読むに耐える言葉使いにするのには少なからぬ困難があった。若いときから墮落し、いやむしろ、墮落と邪悪の申し子といってもいいような女がそのあらゆる悪行を語り、また恥も外聞もなく自分が初めて悪に染まった細かないきさつや事情、そして六十年にわたって続けた犯罪の一部始終を物語るとき、著者は、<sup>9</sup> 自分が不利な立場に置かれることのないように、とりわけ疑り深い読者にそうする余地を与えないよう、この物語をきれいに包みあげることがかなり難しくなるにちがいない。

「序文」の冒頭では先ず、物語の真実性が強調される。同様の主張は『ロビンソン・クルーソー』にもみられる。ここでは「小説」(Novels)

---

<sup>9</sup>原文では「著者」は 'an Author' となっている (注10参照)。

と「ロマンス」(Romances) が虚構 (あるいは作り話、フィクション) の意味で用いられ、個人による実録 (History) という語と対照的に使われている。

一方、物語をモル自身による一人称の語りによって進行させるにあたり、一般読者がこれを読むにふさわしい文体とする存在が必要であったことを断っている。この役割を果たすのが校正者であり、これが真の作者であるデフォー自身であることはいうまでもない。

文体の校正という役割からすれば、むしろ『ロビンソン・クルーソー』の場合のように「編者」(Editor) という立場を設けるほうがより適切だったとも思える。しかしデフォーはここで校正者の自称として Editor, Relator を用いず、その存在を読者に明確に示してはいない。<sup>10</sup>

【訳】しかしながら、この物語を新しい装いに改めるにあたって、みだらな考えをおこさせたり、慎みのない言葉使いをしたりすることのないように出来るだけ配慮した。この女の表現の最も悪い部分についても、そのように気を配った。このため、慎み深く話すことの出来ない彼女の生活の不道德な部分の何カ所かはすべて削除し、他の数カ所は非常に短くしている。残った部分については、どのような清純な読者、もしくはいかに慎み深い聞き手に対しても不快感を与えることはないと思う。それに、いかに悪い物語であっても、それを最善に利用できるのだから、その教訓によって読者が真面目な気持ちを失わないでいられるようにすることを期待したい。それはたとえ物語が、読者をそれとは反対の方向に向かわせるかも知れない恐れのある箇所においてでもである。今では悔

<sup>10</sup>作者デフォーの校正者としての立場を示す語は見あたらない。原文では、その存在は「私」(‘I’) という主語によって示されているだけであり、これとは別に「原著者」(‘the Author’) であるモル、「読者」(‘Reader’) の立場が存在するという構図である。

恨している邪悪な生涯を語るためには、その不道德な部分は、真実の物語として出来る限り邪悪なままで語られなければならない。そうすることで悔悟の部分に光を当て、それにきわだった美しさを与えることになり、また悔悟の部分も悪の部分と同様に生き生きと描かれる場合には、必ずや最も有益で気の利いたものとなるに違いない。

ふつう、悔悟の部分の物語には、罪悪の部分と同じような明るさや美しさはあり得ないとされている。この説に真理があるとすれば、それは、読書について双方に同じ趣味嗜好がないからだと言わせていただかなければならない。また、その違いは題材の値打ちにあるのではなく、むしろ読者個人の好き嫌いにあることも真実であるからである。

ここでは「清純な読者」(the chastest Reader)、「慎み深い聞き手」(the modestest Hearer) という言葉が用いられる。真実の記述を尊び、虚構(フィクション)に対して懐疑的であった、当時の一般読者の道徳性を賛美することで、不道德な物語を提供することへの反発を受けないようにする慎重さと配慮がうかがわれる。

【訳】しかし、この著書を主に勧める対象は、その読み方を心得ている人々、そのよい利用法を知っている人々であり、この物語は終始、そのような方々に忠告を与えているのであるから、そうした読者は話の筋より教訓に、話そのものよりもその適用に、さらには書かれている人間の生活より、筆者である主人公の結末に、より多くの興味を持つことが期待できるであろう。

この物語には数多くの興味深い事件があり、それらはすべて役に立つものである。それらは叙述の際に巧みに読者に心地よいように言いかえをしてあるので、自然に何らかの形で読者に教訓を与えるようになって

いる。コルチェスターの若い紳士との彼女の淫らな生活の最初の部分では、罪を露わにするために多くの適切な言い回しをさせ、これに当てはまる状況にあるすべての人々に対してこのようなことがついには破局に終わることや、双方の愚かで思慮のない、いまわしい行為について警告しているので、彼女の愚かで邪悪な行動について述べているすべての真に迫った描写を充分償うものとなっている。

「校正者」は、この作品はこれを良い形で利用できるような読者に提供し、推奨するものであって、また読者は「物語の筋 (Fable) よりも教訓 (Moral) に」、「話 (Relation) そのものよりもその適用 (Application) に」、より興味を持つものであるとする。これにより、作品の道徳的価値をアピールすると同時に、物語から教訓が得られるかどうかは、最終的には読者の責任であると主張するのである。このように、デフォーは読者のプライドをくすぐり刺激することで、物語のみならず、読者との関係をもコントロールしているといえる。

また、宗教的立場からみた作品の有用性については次のように説明される。

**【訳】** バースでの彼女の愛人の悔悟、そしてそれが病気の発作という神の義にかなった警鐘によっていかにしてもたらされ彼女を棄てるに至ったか、いかに愛する友人の間の規範にかなった親しさであっても、神の加護がなければ、どのように厳格に貞節の誓いを固めたとしてもそれを守り通せるものではないことについて正しい警告が与えられている。このような箇所はしっかりした、分別を持った人々にとっては、それにまつわる一連の愛欲の物語のすべてより、真の美しさを含むように見えるであろう。



一言でいえば、物語全体がそれに含まれるすべての軽率な行為やふしだらさについて周到に手を加えられていると同時に、高潔な、宗教的な目的にかなうように注意が払われている。明らかに不当の咎めを受けることなく、誰もこの物語を、あるいはこれを出版する私達の意図を非難することはできないはずである。

芝居の擁護者たちは、いつの世も、このことを大きな論拠として、自分たちの芝居は有益であり、最も文明化した、そして最も宗教的な政府の下でも許可されてしかるべきものだとして人々を説得してきた。すなわち、それらの芝居は有徳の目的にかなない、最も生き生きと演出されることによって、必ずや貞節や高潔さを勧め、あらゆる種類の悪徳や風習の墮落に待ったをかけ、これを暴き出すことができるという論拠である。もし彼らがそれを主張し、いつもその掟を固守し、それを舞台上での演出の試金石としたことが事実だとすれば、彼らは大いに良い評判を得たことであろう。

この本の波瀾万丈の内容全体を通して、この基本原則は厳重に固守されている。いかなる箇所の邪悪な部分についても、最初もしくは終わりに悲しく、不幸にならないものは一つもない。作品の舞台に登場する極悪人で不幸な結末に終わるか、悔悟の人になるかせぬ者は一人もいない。物語の中で、悪いことで述べられて非難されずに済むものは一つもなく、また立派で高潔な正しいことで賞賛を伴わないこともまた一つもない。他の多くの、もっともな反対を受ける事柄、たとえば、悪い仲間や淫らかな言葉を描写していることさえ、あえて勧める上で、前述した決まり事ほどこれに適切に答えるものはないであろう。

このような立場からこの本を、そのどの部分からも何かを学ぶことができ、かつ何かの正しく宗教的な結論を引き出すことが出来る著書として読者にお勧めする次第である。読者の側もこの作品を有効に利用する

気持ちがあれば、何がしかの教訓を得ることが出来るであろう。

宗教的教訓性は、『ロビンソン・クルーソー』の序文にも見られる特徴であるが、ここではさらに、「芝居」(Stage) を引き合いに出している点が注目される。(校正者) デフォーは芝居の擁護者がいう「有徳の目的」(vertuous Purposes) を認めておらず、皮肉っぽい調子で語る。一方『モル・フランダーズ』においてこそ、それらが十分に実現されていると自信ありげに主張するのである。

デフォー自身は、同時代のジョン・ゲイ (John Gay, 1685-1732) の有名な『乞食オペラ』 (*Beggar's Opera*, 1728) を、パンフレットなどの多くの著作の中で酷評している。登場する悪漢が罪を恥じることなく、またついに罰せられることなく終わってしまう筋立てを嫌ったのがその理由である。さらに『家庭教訓集』 (*Family Instructor*, 1715) の中でも、芝居は若者に悪影響を及ぼすと激しく攻撃している。<sup>11</sup> ただし、主人公の不道徳を最終的に罰していない点についていえば、デフォーも『モル・フランダーズ』について、ゲイと同様の非難を免れないだろう。

『ロビンソン・クルーソー』の序文には見られなかった新たな特徴は、次の部分に現れる。デフォーは、モルが引き起こした事件を公にすることで、今後同じような被害を被らないための注意を読者に促す。

【訳】 この有名な婦人が、人々に盗みを働く手管もすべて、正直な人々に対して、これに気をつけるようにという警告の役割を果たし、罪のない

---

<sup>11</sup> デフォーは芝居の世界にはかなりの知識を持っていたようである。たとえば、『モル・フランダーズ』において主人公モルが用いる偽名のひとつ、スペンサー (Gabriel Spencer) は、劇作家ベン・ジョンソン (Ben Jonson, 1572-1637) が決闘で殺害した役者の名前である。See Paula R. Backscheider, *Daniel Defoe: His Life* (Baltimore: The Johns Hopkins Univ. Press, 1989), pp. 518-520.

人々がどんな手口でだまされ、略奪や盗難に遭うかを知らせ、それを防ぐ方法を知らせている。ダンス学校に通わせるために、母親の見栄から立派な身なりをさせられた幼い子供に彼女が盗みを働いたことは、今後そのような人々たちに対するよい警告になるであろう。同様のことが、公園で若い令嬢の脇から金時計をすり盗ったことについても言える。

セント・ジョンズ通りの乗合馬車のところで、ぼんやりしていた小娘から包みを盗ったこと、火事場泥棒、そしてハーウィッチでの出来事、これらはすべて、どんなとっさの騒ぎの時でもより冷静になり、自分を失わないようにという、こうした状況におけるすぐれた注意を与えてくれるものである。

加害者であるモルの体験ではなく、そうして悪に染まった人間によって被害を被った側の体験から教訓が得られると、その有用性を強調している点が特徴的である。特にダンス学校に通う子供に対する盗みの例においては、モルは被害者側である母親の見栄を指摘し、これを読者に皮肉に感じさせるようにしている。人間の行動のすぐれた観察者たるデフォアの視線を感じさせる部分である。

**【訳】**そして物語の最後で、流刑になった連れ合いと共にヴァージニアで真面目な生活を送り、勤勉に仕事に精を出すところは、不幸な流刑、あるいは何らかの災難によるいずれの場合も、海外で再起をはかる羽目になった不運な人々にとって教訓に富んだ話である。つまり、そのような人々に対して、世界の果てにいようとも、またもっとも卑しい立場の人でもそのうちに立ち直って再び世に出て、新しい人生のためにやり直す機会が与えられることを教えているのである。

以上述べたことは、この本において導かれる真面目な結論のいくつか

の例であり、これらはこの本を世間の人々に勧め、出版することを正当化するのに十分な理由となっている。

ここで力点は再び宗教的教訓に置かれる。「序文」の後半部分においては、すでに述べた宗教的あるいは道徳的視点を繰り返す傾向が強くなるが、モルの生涯を年代的に追う自伝的物語としてのあり方からすれば、重複はそれほど不自然ではない。『ロビンソン・クルーソー』同様に、悪は必ず罰せられ、そこから宗教的な教えが得られるとする定石的パターンの提示をデフォーは常に念頭においている。モルが悔恨にいたって新しい人生をスタートさせるという筋立ては、物語全体の締めくくりとして、当時の読者を納得させるにふさわしいものだったといえるだろう。

【訳】さて、作品には大変魅力のある部分がまだ二つ残っている。物語では、その二つについて少しその概略について触れ、部分的にはその内容は明らかにされてはいるが、どちらもこの本の中に含めるにはあまりに長すぎる。つまり、これら二つはそれぞれ一冊の本になるくらいなのである。一つは彼女が女将と呼んでいる人の生涯で、彼女は数年の間に貴婦人、娼婦、女衞といった色々な人生のきわだった境遇を体験した人という。それからこれは、いわゆる、産婆、世間の言う産婆置屋、<sup>12</sup> 質屋、小児引取人、盗人請負人と盗人買い主、つまり盗品の買い主だが、要するに彼女自身も盗人であり、盗人の養成稼業というようなこともやり、

---

<sup>12</sup>原文では 'Midwife-keeper' であるが、この語は Mother Midnight と両義的な意味をもつ。十八世紀の Mother Midnight という言葉には、female bawd (女衞) と midwife (産婆) の二つの意味があった。See Robert A. Erickson, *Mother Midnight: Birth, Sex, and Fate in Eighteenth-Century Fiction (Defoe, Richardson, and Sterne)* (New York: AMS Press, 1986), 仙葉豊「女衞と故買における欲望の三角形」— Moll Frith/Flanders/Hackabout そして Jonathan Wild — 『英国小説研究』18 (英潮社 1997), pp. 39-40.

最後には悔悟者となった。

第二に、流刑となった主人公の夫の生涯である。彼は追い剥ぎで、十二年間にわたりこの稼業を続け、捕まることなく悪事を続けてきた後、最後もうまく立ち回って、ついには罪人ではなく自発的に流刑者になった。彼の生涯は信じがたいほどに波乱に富んだものである。

しかし前述したように、これらはこの本に含めるには長すぎ、私としてはこれらが独立した形で世に出るかどうかにも約束しかねる。

事実、この話自体が有名なモル・フランダーズの生涯の最後まで至っているとはいえないのである。というのは、彼女が死後書くことでも出来ない限り、誰も自分の生涯の最期まで書くことは不可能だからである。ただ、彼女の夫の生涯は第三者の手によって執筆されているので、この夫婦のことについては大変詳しく述べられている。どれくらい長くその国と一緒に暮らしたか、そして八年ほど経つ頃には、二人は大変な金持ちになっていたが、二人ともイギリスに戻り、そこで彼女はたいへん長生きしたということ。彼女は最初の頃ほど徹底して悔悟者らしくなっているようでもないが、ただ以前の生活に関しては、どの部分についてもいつも嫌悪の情をもって話したということである。

メリーランドとヴァージニアでの最後の場面では、楽しいことが数多く起こり、彼女の生涯のその部分は大変好感の持てるものになっているが、話に彼女自身によって語られている部分ほどの味がない。それゆえ、この序文もこの辺で打ち切るのがより賢明と思う次第である。

「序文」の最終部分では、女将と、流刑となったモルの夫の生涯が、さらに読者の興味を引く事柄として取り上げられているが、多少蛇足的な印象を免れない。デフォーはここで、『モル・フランダーズ』の続編を予告、示唆しているようにも思える。『ロビンソン・クルーソー』の場合は、す

ぐに続編執筆が実行されているのだが、本作品の場合はその事実がないため、少なくとも今日の読者にとっては必ずしも必然性のある説明とはいえない。<sup>13</sup>

#### IV.

以上、『モル・フランダーズ』の「序文」の詳細をみてきた。物語の真実性の保証と、道徳的および宗教的教訓を軸にする点では、『ロビンソン・クルーソー』と共通の手法をもって書かれているといえるが、教訓による現実的効果を強く主張している点においては、新鮮な印象を与える。<sup>14</sup>

『モル・フランダーズ』の「序文」は、デフォーの他のフィクションと比較するとかなり長い。娼婦を主人公に据えるという設定のためか、デフォーは慎重に読者からの反発を回避するべく、あくまで教訓性を強調しながら読者を物語に導く。物語の具体的な言及が多いことは「序文」を物語のすぐれた要約とするのに役だっている。このように、少なくとも体裁上、つまり建前の部分では、読者はプロットより教訓性に興味を持つとし、この作品は見識高い読者へ推奨する物語であることを強調しながらモルの物語の出版を正当化するのがデフォーのとった手法であった。

ただし、「序文」においておこなった予告あるいは公約は、本文におけるプロット展開においては、道徳的あるいは宗教的見地のいずれからも必ずしも達成されているとはいえない。しかしその公約の不履行は、実際は当時の読者にとっては作品の価値を下げることには少しもなっていなかつ

<sup>13</sup>1730年に、デフォーはモルの半生の簡略版的な内容を持ち、追い剥ぎであるモルの夫の話を含む、『人生いろいろ』 (*Fortune's Fickle Distribution*) というフィクションをダブリンで出版したとされる。しかし、これがデフォーの真作であることは証明されていない。Norton 版の注を参照 (*A Norton Critical Edition*, p. 6.)。

<sup>14</sup>作品全体の構成上は、「序文」はタイトルとともに読者の興味を喚起する効果をあげている。この視点に立てば、作品は、タイトル (headline) → 「序文」 (lead) → 物語 (body) という、新聞に典型的にみられるスタイルをもつといえる。

たであろう。すなわち、デフォーがいかに周到に作品の体裁を整えてみせても、読者はやはり、教訓よりも、モルという主人公の波瀾万丈の半生と、ヴァイタリティあふれる人物像に作品の真の魅力を見いだしたであろうからである。<sup>15</sup> 娼婦を主人公とした物語を世に問う作者の立場と、その読者の双方にとって、建て前と本音があった。それは今日の読者にも当てはまる。

イアン・ウォットは、『イギリス小説の勃興』の『モル・フランダーズ』論の中で、デフォーが作品においてアイロニーを意図したか否かについて重要な指摘をしている。<sup>16</sup> ウォットは、作品の表向きの道徳的傾向と、実際に読者を惹きつける内容との間の矛盾が一つの文学的技術であるとする。そのために今日の読者がデフォーの作品をアイロニカルに解釈しなければならないとする傾向に対しては異議をとなえる。すなわち、『モル・フランダーズ』の中には一貫したアイロニーは見られず、物語に散見されるアイロニカルと解釈されうる点はデフォーが意図したものではなく、「社会的、道徳的、宗教的世界における葛藤に手当たり次第に物語としての信憑性を付与しようとしたことによって産み出された偶然の産物」<sup>17</sup> であると結論づけるのである。そして、作者デフォーにおける葛藤は、彼自身のもつ経済的個人主義と精神的救済、その双方への強い関心から生まれてきたものであると説明している。

一般的に読者は、作品から何か単一で象徴的な意図を読みとろうとするが、『モル・フランダーズ』の場合、その意図らしいものはいくつも見いだされるのは、以上のような作品の性質によると考えれば納得がいく。「序

---

<sup>15</sup>モルの人物像については、拙稿「*Moll Flanders* における人物像」熊本大学『英語英文学』第37号 (1994), pp. 51-58. 参照。

<sup>16</sup>Watt, pp. 93-134. (*Chapter IV Defoe as Novelist: 'Moll Flanders'*), 邦訳, pp. 133-194.

<sup>17</sup>Watt, pp. 129-130., 邦訳, pp. 184.

文」のみを取り上げれば、巧妙に世間からの批判を回避する優等生的前書きのように思えるが、実際の本文はそれを裏切ることになる。道德教化の書としては、『モル・フランダーズ』は読者に必ずしも満足を与えない。しかし同時に、モルの物語は単なる女盗人の悪徳の生涯の記述には終わらない。モル個人の自己中心的な性質と犯罪についての記述が、デフォーのいう「有徳の目的」と矛盾を引き起こしながらも、同時に作品全体を支え、それこそが作品の存在意義となっているのである。「序文」が建て前と本音を使い分ける典型であろうが、物語の中心が反省のない主人公の伝統的な道德秩序に反した生き様であろうが、モルは変わらず旺盛な生命力を発散し、曖昧で両面的な磁場をもつ作品の魅力となっているのである。そして当時の読者に大いに人気を博したことが、その魅力の何よりの証明であろう。

2000. 1. 28. 受理